石門

心学道之話　四篇　下

ロ 9
3895
12

心學叢書

心學道之話四編巻之下

夫について爰に御咄が出来りまする次第は洛の所に小さ
るお医者があつて相應に業もありおりけるさ
が其家の内儀が音に聞へし利で在る時お医しやが
調合場へ出て薬の調合して居らるゝとかの内儀が縁
よりのぞいて見てモシその御薬ハ何所へ御やり
なさるのへと問ければ医者是ハ裏町の権四郎どの
乃内儀の薬じやといはれければかの内儀のいふハ
るゝふハフ町の権四の貧乏人あれの噂のぞうろう。

門 ロ 9
號 3895
巻 12

早稲田大學圖書館
昭和27.6.16 受
藏書

そのうちに大猿が。あらはるゝは及ぶまへ。そのうへ此ご縁を
桂枝がゆつさり高座じやらぬ。その高座い桂枝を
マア そのうちに引まとゐるやうがあるものゝ御身ハ全体
何ごともみな合せがなくて。どうもならぬシテ雲斗も。
あまり多いゆゑちつと御餞あそばされいる。そのかはりにハ
茯苓が出どろめつさり下座いげる。けさを多分と
御入なされと太きな孫して云きかしければ。かのお医
者も。おそろしき虫く何とする病、平癒もせずにしてあ
まこと小女子と小人とハ書ひがしじやと独言此中に
いゝそれやられバ。かの肉塊のたゝきるまハ其小人とふ

るゝと肴を喰ぬ精進乃やうと思ひ書ふとうつるゝて
を糊にこしらへ。おりのきまるお医者の薪とどう〳〵と
白眼で鼻を嗅ていそれまでハフかまへハそんなまいハ
しやるのがようし八元来女でも精進をさせるハ大嫌
ひ一年三百六十余日肴があつてハお飯も喰ハれ酒も
飲れ月に一度の親の日でも。精進させるのハ大きらい
ね。そのうへ此まへハてましが口を書ひのやうにいふてやる
が。あちらの肉ハ今の中にてましが身を読まんとして
マア此位で飛されるゝ前まかせん法ておりまする。ますさ
しと書ふどうしやるいゆゑおのゝのたうつやうしるひ

がてんじや。そんな出来し勢おいてはらきをするその
算も撿校が多い蜜柑の皮になつと智なされと表に
人の聞もかまハバ口の端でおもいまハせてベチヤリ
クチヤリいそれやすれど茶碗の人が聞て内へがくつて
くるしまうほどへ一口二口とその評判がたかうな
つてアノ御医者ハ御内儀がいつでも配剤せうらげ
な。それでハどふも気味がわるいマアあの御医者乃
御薬ハのまねがよいといふやうに。何の科がないまで
もうりまするものいつとなくだん／＼茶とうも
なへやうになり終にハ身代を仕舞ふようなこの

咄ハ何所へいつてもあることじやゆゑ知らねばならぬ
ましてあなたさがたハ実に女房ハ大事なその
じや猶に女中方ハ夜の居理をよう／＼と御合点
なさきたく／＼あつくの勤めと第一にして
御亭主の火を消さぬやうに御用心なさるがよい
扨やまた長幼有序といふハ兄弟よりその八身分
に。其のつかりの前後のけぢめの事へ。かりそめにもその
次第乃乱さぬやうに。世話バするといふことじや。
其の次第といふハ兄ハ。兄のつかる前に生れてあとさ
との事ふて子孫バおしくねぬの弟ハ又後に生れて

出ることゆへ下に附かねバならぬものの。ソコデ兄ハ上
にゐつて弟ハ親の中へ入るものゆへ弟を我子の指
図に可愛がつて教へ導いてやらねバならぬ弟ハ中さ
下にあつて位の卑ゐものなるものゆへ我兄をバ
親のやうに敬ひ慎んで。その下知に。たがハぬやうに
勤めるハねバならぬものじや仮令兄弟が幾人
あるとも次第々々にその序の。みだれぬやう
に。せねバならぬものじやゆへ長幼ハ有序とハ
てあるそのこゝろとよんだ事よ
裏毎に睦まじうつて候をお末来ハ中へ此おりあへぞあれ

兄弟ハそのとほりにあらねバならぬものじやが
さとハ田舎などでハ兎角さうゆかぬが多い親が死んで
中ごろ五十日も済ぬうちにもハや兄弟が家督論に
どうのかうのともいへる兄がおれハ惣領の譲り
じやから家財も株家督も。みんなおれが物
じやわい。おれが自由にするといふと弟ハまたそれを
恨でぐづくいふ。おれとも親乃子じや。さう聞ハやらさ
ねくたびれ果を。ふとく合て親の継乃志のぞを
けづり果ハ御家まで御に厄害を傷つるやうなとも。
あることのじやがかんしマア気の毒なるものじや

なれバ兄弟ハ。かたちこそ別なれ。もとハ一つであつ
て同胞といつて。母おなじ血肉をわけし一躰乃
ものじやゆへ親の躰で。いふてみると右の手と左
の手乃やうなものじや。それがたがひの欲乃為
に兄弟ハさからひあらそふといふハ。ちやうど躰の右の
手と左の手が諠譁して躰を左右へ引裂やう
なものじやぞよ。御互に持て出ると。そのまア不
孝の罪なるも中々かるいことでなし。親へかゝる持乃娥
ハ御取あげになつて御討罰を請られる喧嘩
兩成敗に兄弟とも天窓をピシヤリと。御挨拶なさる

その時にやう〳〵眼がさめて詰らねことをした。あの
やうなことせずと。世禄バよかつたものをと云禄バよか
つたのに悔んだところが屁ひつた後の尻すぼめ
人様の悪いあつさと世間の人がおもてにせぬやうに
なつたうへで何の益にもたゝぬのみか大きな生
涯乃瑕疵になるのじやがそれが畢竟人の為を知
らねからの結ぶもいふ兄弟ハ他人のそもじめのぢど
いふことを得手にもちぐるうら身つさへじや此
兄弟を他人のそもじかといふことへハ大分おもしろい
訳のあることとみへまれ。その訳といふハ。また見ることハ

背といふところで兄弟ハ他人の背他人ハ兄弟乃
末じやといふところで吾が身ハ世界中に一
向の他人といふものハないやうなものじや論語にも
君子敬して失ことなく人と恭しうして礼あ
らバ四海の内ミな兄弟なり君子なんぞ兄弟なき
ことを憂へんと子夏も司馬牛へいひきかせし仮令
実の兄弟でも道がなけれバ他人も同然なり
正道さへ行けバ他人も兄弟と同やうになる也他人
のやうじやうハやつぱり兄弟の交りに徹して我より
目うへの人や年の多い人ハ。みなが兄の中よりの也へ

兄と敬う。こゝろをわすれてハならぬ又我より目下乃人
や歳のわかい人ハ我が弟の中よりなるもの也へ我弟と思ふて
あはれミをもつて愛し慈ミてやらねバならぬものなるに
るゆゑ兄弟とバ他人の背といつてさへそのことく申した丈
ども兄弟ハモウ他人のうちじやといふ。されどもよそのもの
ドやうのあるなしでふるまいツイ弟の中より大きな違ひが
おこるぞ。そこで人ハ兎角心を知つて天地と我と同根
万物と一体にして。その一体のうちにおのづから貴賤
尊卑の差別のあることを体会点せるやうにするが
惣体世界ハ元が一体のことの也へ種万殊と申して

圓とおもはずに。みなわが身ハ又萬殊とわかれてある物の由へ
一体といふとも知らずや分るものじや。それをたとへて
いふて見るとてうど此からだの中のやうなものじやけから
どちらも元ハ一体の事なれど頭ハ上にあつて尊いものの
足ハ下に附く様しんとのよふも。地のつるし左右乃
かはり。ちつとも身のうちも腹じやの脊じやの肩じ
やの腰じやのといふ。それぞれの差別がある中なものの
じや。そこで是を人倫のうへにたとへていふてみると
天窓ハ。おのづから上にいつて居るものの由へ。あたまハまづ
主人や親や夫や兄やの中なもの。又手足ハ。あの

つから下にはたらくものゆへ。あしハ家来や子や女
房や弟のやうなものじや。それで今日の五倫の交り
もてうど此からだの働のやうにならねばならぬ
御家来も此からだの働くやうにヨウマア氣をつけてから
うしろ何時でも此手足を使ふにハ此天窓がしらせて指図
動いておしへるとそれから手足がそれへつれて働
くに働くものじや。まづ朝起るにでも天窓がさきに
ふよつと起あがると。それから手足が。おいおいに働て起る
しやうと夜ル寐るにしても天窓がさきへ。ふせりて仕舞し
て寐ようとするとそれから手足がたすけて寐させ

はなして自身違も銘く落るが。その落とあつてもま
ハ天窓の大切なる事をしらせねと見へて。おりく天窓
とん鉢に手れ捲くり磨くり按たり。さまぐに介保
する是が誠に孝子の親につかゆる仕形といふものじや
が。なんと深切な仕形じやないかへ。まだ是迄おさへてつゝり
座て居るとても何ぞ天窓へ物が落かゝつて出らう
ドッチウばと掛りよるもあろまいが待てチヤツとさける是
がこれ前にゆらるしやる八嶋の合戦に佐藤次信が
能登どのゝ箭さきに立て主人義経公の御身がはり
アノ立てたとおなじ孝行で一体分身とはこれと

いふものじやが。なんと奇妙じや御座りませぬか。夫
から又かやうに座て居て若アノ棚の重箱でも下さ
うとやろとおもふ。おりよい時ハまづ天窓がさきへ棚の方とさう
と見かけるとそのまゝ足がヨツとのびて立あがり
天窓の向ひさ方へ。ぞろ〳〵とすゝんでゆくとまが。
ちやんとあつらへて棚の重箱をとりかゝるが。それぞく
も自然手がとゞくが〇るし足がやつぱりこうろくて
足先をつま立サアく〳〵ゑつこらやとしとまのとど
かぬ所を勤めて中る。あれが役めハモウ済ざうといふ
て。知らぬ顔をしてる妙じやね。なんと深切なものじや

うかうかそれから又側まはりにゐる嫁が見たら。たゞ一人でも
姑とおもひ附て手がありちつと面白いとおもはるゝ、
どうでも足が紐ていざりよつて手を助けてやる。その
上から足のまへとなりてある事は日本一殊勝な事よ。かず
かぎりはあいまへ手がきこえるその所に足をあてゝやる
るゝが何程かうれしからうとまねかすが疵けれバ撚てやつたり
痛まきバ摩てやつたり冬ハ足袋を脱してやり履
したりきるもまが結てやるし垢切をそろへてやる
事もまが結てやるゝまた風呂へ這入るも湯加減
のあついぬるいハまづまが先へいつて見てヨツトよしく

こまりきバモウよろこみサアく這入アゝをとつてのて
やる是が嫁の和合の道といふものじやが。なんとむけ
まじいるりとやるひらそれから又座敷でも下て草履でも
履ときにハ人の草履とそれ遠へねやうにハ天窓がさきに
吟味してやりまさ縁をなるく時にも此路ア路と
いふ事を天窓がさきへ見て教えると足がそのとほり
あるんでゆく自然うちまがキヨロく余所見どりして
油断をするとツイ足が水たまりへ踏込だりの糞を
蹴ちらしたりさまぐる不調法がおこるそりや足の
不調法といふべけれどやつぱりて窓の油断から起る事ド

や。さるによつて人も人の所に居る。主人じやの親じやの夫じやの兄じやのといふお所役のものへよつぽど拘るゆへ心まゝひせうじや。あつかね大事なものじや。さて又此ゆへにといふ物のは実に平生素直なもので。此のまゝで度も天窓の下知にそむいたといふ事がない。いつでも天窓の下知のとほり動きさ。さうしてゐて勤めて居る。あたまが又そむいて出かけますせ。それゆゑこそ此お江戸の所方の辛労四隣の中にいはしやる大変といふものじや。あぜるまゝば天窓がアノ椀の重箱と向きに紀まで庵の草履を後ふとあつかり天窓が庵乃草履と向きし足が椀乃重箱の方へ往て仕まうじや。そんなら忽ち首と胴とを捻切るやうになる。是よりうへの大変といふものはない。人の文字もでうとそのとほり子が親にむいたり家来が主人にそむいたり女房が夫にそむいたり弟が兄にそむいたりして御上の下知にそむいたるは。みな世界の首と胴とを捻るのじや。由へ是が誠の大変といふものじや。それでは此ゆへに大変くと中されのじや。それじやによつて人に心が勤本心と知らはよほど万殊にして一なり一本にして万殊なる妙を能合点せうや。あゝりませぬ。さうらしと一句

の他人といへば。なんぞ敵同士か犬か猫かのやうな
ものじやとおもふ也。ツイ人を突倒しても金をとして
やらふ人は徳でも損させてもものといふ中なれど。おそろしい
ことが多なるぞ。そこで友に朋友の間は有縁といふてたつて
世なる他人の交りは仮初にも嘘いはぬもの。ないやう
信実をもつて交はらねば。なしぬはりのじやといふて
ある趣ぞて世界の交りはおたがひに力を添へて助
け合ねばならぬ世界じや人といふ字をみらるゝぞ
まるせおちまれたがひ合て立て字じやぞもと漢字に
若者より友よきぞ大あやかれる己のこやむる事ぢや。

売人は買人のおかげで。たすかり買人は売人のおかげで
たすかり貧乏人は金持のおかげで。たすかり金持は
貧乏人のおかげでたすかり。在中の雲助は毎日駕
籠で足の。よわい旅人を。たすける也。中にも足比
よわい旅人は駕籠にのつて足の達者な雲助をたすける
ける旅籠屋は旅客をたすけ旅客はそこにやどる。たすけ
あん摩取は足痛をたすけ足痛は按摩にかゝると。
たすけあふもんじやおもしろい世界じやないか
木の実をば猿に喰せる猿はけがれ喰せて実が猿は
さうかゝるゆへ世界はどふしても我一人生てはいかぬもの

出来ぬ也孔子様も夫仁者ハ。おのれ立んとしても欲すれ
バ人を立おのれ達せんとし欲すれバ人を達し能近く
譬を取を仁の方といふべしのこと御弟子の子貢へ仰
おかされけるハ世の交りハ行かたも我身のごとく
と親矩して人の身のうへを思ひやり。どふぞ人の
ためになる事ハ世界のためになる事ハよく精出して
人をたすけまするやうとするがよいさうさへすれバ。いつれ
なまやら我もちやんと納つて居るそれをたゞよく
いつでもみると後守の事しるもので多くの人とむり
ふの災へ後もしとおりようちよ。いつのまにやら我

もちやんと渡つて居るが今によろしきことのじやうなれ
ぞさうなふうりかゝるは菩薩世界へ出ましたやうな人を究
働にても金を仕てやるよの世界の妨げして居るが
我一人。助かるとおもふハチト尾籠ながらたとへじやけれ
ど結構な茶の湯乃席へ呼まれて來て拵しものお客
の掛物をかけ繪又ハ古の書ひの墨跡して設付候二〆
ら茶の子も出てあるを出でだきなる屁を放出したならば
其後にハ誰も相人よまるりのハそちの中にあるぞそれじや
によつて昔から諺にもいふとかり人を兇咀ハ穴二ツで
人に損をかけるとがおそろしいとうちら損する銭

忍ぶなれば人を陥いれる心がおこるによつて我身の滅るをも忘るゝ也。此理非の一倍も十倍も勝た方が負なり
負た方が勝なり。そりや力ら強い虎が首をきるのでも
ゆるさず双方首へ縄をうけて足とりくを編隠合て是も
ウテくり合ふうちに勝た方ハ。どつでも師匂もドニと倒
るゝ方負た方ハどつでもちやんと起て居る。てうど世界
義のてふくるみとのでもむつかしき人を倒しきものゝ其
身乃ことで覚べきなし人を呪咀さうとの其身乃業
えさためしハないぞ。それじやによつて此世界ハたれも
命のいつもんかぎり只我欲おのれとの行をする

うも世界のさわ人のために此身とほくよりうれ仕
中らんハ。ありそのところを失ても心うき形容ハ人でも
心ハ畜生也一向人に生まて下絵ハあへ中さるものでござ
りまする。ゆへ徳ハ定ぬ。なぐしいとものでゆる者りまする
それよりのて夜ニ蔵んるぞかしが似たりまれハつまハ
道頓大坂にあつてるで似たりまれげるが同所のわる
明女が難波稲荷の後渡町遠を通りおられかしき年
のほる千字くりの乞食が十四五才の乞食の子を因
つて質とよつて彼に押付らくよ殊めてつひまれく己
か畜生め。わきが平常つよるとおのれハ何の事で

おつるぞ。そのやうな根性ではらゞきおきたが首へまで縋
りかけるぬしやゆく。そのまゝスハ捨置まいと擒りこぶしを。
ふりあげて厳しく折檻いたしましたと側にゐました年乃
頃四十ばかりの女も合点でうなづいて見て居ましたが
まれハ。それにつけ爺さんのいひやるがにくいと
ねへ。今そのやうな眼にあはずとも。おのれが親のもうかん
ろもいはねばこそ。いまだこれで年よりてくる身も
えんまさせ給ふばかりの男もまちがひ蒔をふるひし擲も
く修いやうがよいしてやらうと猿がつよくキヤツく
といふと耳までかけ脇ざし蹴つの目に合せまれ此人性

来の人もだん〳〵立どまつて見て居りましたが
あまり厳しくおせかれますからカノ形容もあんまりのひど
側へ寄て。いふそれなれば。お爺さまア待て。その様に厳しく
なさるにハ定て何ぞ訳もあろうが。お爺が挨拶して申ゆゑ
れてア遠慮してやきもつてん申してきバカノ合点が申
まれハ。イヤ御豆腐のいづくにハ出なさりますが教て進らく
下さりませ。こんな者のを淋しておいて。いかな親の
目も溺れませぬといつそ潤とどしりして
ますく痛める。げしゆゑ外の人も恥くなる。ゑんハきらひで。
あるが。けさど今日のところハ我しがあきれ申ん

じて殺してやるとぞおもひましたれバかの乞食ハ涙ながら
おたすけをつれ捨おかれませぬ奴あれど御主人様がぞその
やうに御様子掛下さるゆへまづ今日ハ殺してやりませんが
親もくあさけるに奴で御座りませ御家来をまいて下
さりませ其の主な此奴が母御でござりつくしい鰻ハ子ヲ斗
縁なしむしてハ喰ありませんその鰻ハあさぐへしが見て
見おぼえのある鰻で御座りましたゆへ何所で手にいれて
来のかと問ましたれバ御当家の北の辻で辻見世を出
して居る鰻屋さんに買ふたと申ましたそれハ合点
のゆかぬ事実にあさましき鰻をその店にて沢山よ

乞食ヱ下さる筈ハあれバ盗て来たのじや。おのれやうな
根を搦て問ましても莫ふらちがひふるゆへ申ましたゆへ
さりとハ不審な事じやとぞんじ何事かある哉と申合
ましたも安心も出来ませねゆへお前様御当家へ参
アゆしを私が申ますとどうかひ申ますれば鰻やさ
んの咄しやるまいぞさて御家内のるいねがすじやさう
きふ于ト用があつて夜どうぞと明さるまツイ鰻と
十ヲばかり盗ますとてれハざざめて咄ありませうか
つかまへるも乞食のよふでおろふかして漢刃世の愛
さぬとぞあらし合て御座りましたそれをとるて見る

くし胸のうちの口惜さぞうやうてそおのきとさらく
かうぴろく貴て向ましたれバかゆく益ごてもと白
状いたしましたがおんとアゆらしくじやませ情あいと
じやゆゑ存りませね。うまくしも只今こそ。かやうな
も合ハつくしゆきもどえハそ国の小百姓。親の代か
ら不仕合で持高もハなくなりきまれ村中へ厄介ハまそをその
引くを送りまんうち。ぴるあるる芸の周旋申し更帰
ともに長のまづらひおしさかりの諸方くや縮谷
すでも曳そらひ稼しと苦せいたしまして食箱
ハ助りゆしたが此徳のよふり更帰しもよ足のよおい

からごとあり何をするにも出来ませねバ村中の厄介
にかゝりましても幸の毒と江戸ハ繁華なる國をさしてかやう
なさましハ合もとおり人様の門に立て何ぞもらひ
貰ひましたが。つまて度も人の物塵一本箸ほども盗
ぞんへハ御座りませね。そのうへ人をもあざむき盗み
てもよいものか此中なる形をしても。しいも合へ
はいたしませね稼をの為も薄一枚。鈌攬あつて門に
立。乗りハあや。ひもじいのうれ艱難をいたしますれども
平覚。盗をせまいが。それゆへエアノ奴らも明くまで
いかてせすするハ。かまりても合ふなりまするもをんで

ろくろうでもなく段々の不仕合がつゞきかくの
仕合せ天命の乞食あまハ是非もなき乞食せよ。かるならバ
能とうしやむなき形までも乞合ハきるとても乞までも合を仕て
是るから。ぶんに薦ハ着るとても乞ホ薦と着て是なし常
しらずて守せまいぞ。それをマアあの奴めハ何所へ迷おり
ましてやう前方もその中なる大きてとるかうし
ましてこ二ツ子の時分から六十までとちへさん時から
アノやうな悪根性をもちましてハ。ゆくゆく後にハ巾着切
店借じやの万引じやのと段々手が出まるしり出まして。
ついにハ人様の手にかゝり御殺されふ名をるさとぞ

それまでハ世の常でも御公儀様の御手にかゝり追放
じやの遠嶋じやのといふさまぐの御厄害で悔る
奴めちごハあの世へゆきて持まで浮おりて人様乃
手を借ふようにするうちがまり手に請けて殺しての
とそんなやうなものの中にあるさま様方が御まへにて
下さりましたら、今日程ハ助けてやりましたら冥加ある
奴で座りましたれバ。コレくおのれも能く手をつくれて御礼
申せや。なりがたいぞんじますると夫婦が。たゞひとつ頭を
見合せ涙をホロくこぼしすらりて居るのを
感心して見るぞとさねとのもなく打合せの

足など出してやるものも御座りませぬとて
じやが何と感心な。そのもあるものじやナ形容ハ見ん
ことハ乞食なれども心ハ清い君子大人かしこまハ薦を
着ても心にハ錦を着て居る是が即孔子の仰られた
志士仁人ハ生を求めて以て仁を害することなし身を
殺して以て仁を成すことありと申すもので心の大丈夫と
いふものじやが是につけても銘くしどもハ実に。それから
しひるで御座りませぬ形のうへにハ飽まで食ひ暖に着
てもそのうへに雨露もうけられぬ借り銘く身分
お蔭つに結構な家作してその中に寝起として。その

合羽にハ傘やら菓子やら酒やらで。さまざまの手厚
じやそれが足らいで花見じやの抜参じやのと栄耀乃沙汰
と仕て居らるゝそれとどうりがちひするとも思ハれ。お主が
足らぬの是が悲いのと年中。不足だらくで心の乞食と。
するといふへ。なんと浅ましい根性じや御座りませぬ
か実に貪欲な道しと孟子のいはれましたも是じや
さりとは乞食根性じや身の行ひも。そまつて御て不忠
不孝のあるが出来る夫婦のいさかひ兄弟のいさかひ
他人の交りハ偽りの寄合家業をおろそかに分限を忘
れ又かかるまゝ酒に耽られ。その風の結構ハ人を

御座しきりがたくる歎様なれども友たちへハイヤハヤ鼻持
もならぬ穢らハしいまでござりまする。よマア野鄙の悪
ねるもじや道を知らしやつた聖人の清い御眼から御
らうじたらどのやうに汚らはしう思しめすじや。そこで
哀な聖人これを憂るゆゑに契として司徒なさしめ
世界の人々まづ人倫の道をゝしへしらしめ給ひしハ
アゝまだわがひとなれど心知て此身の外に道もなく道
のあるに世間のあるまひとを会得し只一筋に親に孝。
君に忠。夫婦和合。兄弟むつまじく他人の交はりに
信實をもつて交るの五倫の法をはつしの此命惜まん

かぎりハ勤めねバならぬ様ばかりしれぬるまで御座りまするとかう
が申しますも。是ハ只口でいうで。録う様が利きま
せぬ実になかなかいるまで御座りますれども。どうぞ又お茶
さん方も耳をそろへてなされてしさう
ますればそれが天地神明の御恩親の御代泰平の御恩
親じしやものでござりまする。扨相かはらぬ長ながる
しござる御退屈で御座りまするまづ今日ハ是限り

弘化四年丁未春刻成
心學道乃話五編
廣陵 花蹊堂 出阪

京都錦小路数屋町東ヘ入 伏見屋祐七郎
江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
大阪心齋橋南壹丁目 敦賀屋九兵衛
同松屋町久寶寺町北ヘ入 大和屋嘉兵衛
同農人橋通谷町西ヘ入 本屋吉兵衛

書肆